

俊成の古今問答をめぐって

——問者の知りたかったこと——

一、はじめに

古今問答は藤原俊成（当時は既に出家して釈阿と名乗っているが、本稿では俗名を用いておく）が、古今集の釈義に関して問者某との間に交わした問答のメモ（問者側による）である。佐佐木信綱によつて発見紹介された飛鳥井家旧蔵本（現天理図書館蔵）が孤本であり、仮名序から巻十六哀傷までの零本（首部も欠）である。その後西下経一により全文が翻刻され、⁽²⁾現在では片桐洋一氏編による影印で読むことができる。本書に関する研究は以上のほか橋井清五郎・谷山茂・秋永一枝・松野陽一各氏の御論考があるが、諸先学の関心は文中「予」と記される問者を誰に比定するかという点に集中している観がある。名前を挙げれば、良経（橋井）・中山兼宗または忠親（谷山氏）・兼宗（片桐氏）・守覚法親王（秋永氏）・兼実（松野氏）となり、筆者の中では兼宗が有力かとは思ふが、未だに確定的な根拠を見出せないで、本稿では問者が誰であるかは特定しないままに考察を進める。但しいわゆる

浅田徹

るプロの歌人ではないだろうと思われ、このことは本問答の質を考える上で重視したい。

本問答は始発期の古今伝授資料のひとつとして貴重なものだが、同時期の他の資料（教長注・顯昭注・勝命序注等）と違つて問答形式を採っているため、問者側の問題意識で場が領導されていることに注目したい。このことは俊成歌論の研究者たちにとつては障害になるが、院政期から鎌倉初期に至る歌学史を把握しようとする立場からは、一般歌人の意識をさぐるための絶好の条件といえる。本稿ではそのような立場から、俊成のような有力歌人と一般歌人とが作りだす歌学の構造をうかがおうとするのである。

ところで、本論に入る前にひとつだけ確認をしておきたいことがある。

この問答で俊成が使用した古今集本文はいわゆる建久二年本の系統（筆者の用語では俊成本のうち二類本⁽³⁾）であることが片桐氏によつて確認されており従うべきであるが、問者が所持使用していた本文については筆者は意見を異にする。

片桐氏は恋二606の五句「われのみぞきく」・恋二607四句「したにながれて」・恋二473下句「せきのこなたに人を待かな」・春下121四句「こじまのくま」の四箇所から、問者使用本が六条家の清輔本系統及び雅経本と一致すると論じられた。一致しない例には恋三616詞書「やよひのついたちより」があるが、「これはあくまで例外であ」と処理しておられる。その結果片桐氏は「問者の使用した本が、清輔本か、清輔本によって校訂したことを奥書に明記した雅経本に一致する」ということは、問者が本来六条家に近い歌学を学んだ人物であったことを示している」と推論されるに至るのである。

しかし右の論述は事実と相違している。確かに問者使用本は清輔本と近似する点が見られ、氏の挙げられた例のほか476詞書・478詞書・733734754820などを示すことができるが、一方清輔本と対立する本文も仮名序「おほき三のくらゐ」・「世はとつぎあまり」・351379402422463615622702ほかの例があり、片桐氏が616について「あくまで例外」と述べられたのは妥当な処置とは言えない。

また、清輔本同様に近似する雅経本につき氏が「清輔本によって校訂したことを奥書に明記した」本と述べられるのも正しくない。雅経本奥書には「同年（嘉応三年——浅田注）四月七日以前太皇太后宮大進藤原朝臣清輔貴本比較之」とあるのであり、これは校訂ではなく校合の意であって、事実雅経本には清輔本による朱の異文注記が多く存在するのは周知のことであろう。

雅経本は崇徳院のもとにあった新院御本の系統の本であるが、新院御本は当時非常に有名な本であった。問者は和歌に熱心な人

であると考えられるので、新院御本に関する情報などを断片的に入手して自分の所持本にとり入れることはありえよう。現存の本文状況では問者使用の本文からその歌壇的位置を測定することは困難であると思う。

なぜこの点にこだわったかといえば、片桐氏の要約に従うと本問答を「六条家」と「御子左家」の歌学の違いのあらわれとして解説することになってしまう恐れがあるからである。筆者はむしろ清輔や俊成を有力歌人としてまとめて歌壇の一方の極に置き、他方に問者ら一般歌人を置く形で当時の歌学のありかたを理解したいと考え、本問答もその構図の中で把握しようと試みるので、「六条家」対「御子左家」といった枠は予め外しておきたかったわけである。

以下本文の引用は影印本に拠ったが、該本の書写形態は本来の談話メモの形をよく留めているだけに、そのままの翻刻ではかえって読みにくいので、ここではあえて原態を崩して罫と(密)とに区分し、句読点・濁点を付して掲げた。また古今歌は全形で引用されることは少ないが、全形を示した方が理解しやすいので（一）に入れてカタカナで補填した（本文は流布本による）。あくまで便宜のためである。古今歌には国歌大観番号を付しておいた。

二、「それはどんな物か？」

問者の質問の中には、もちろん我々にもごく自然に受取れるものも多い。例えば

○花のひもとくとは（246）

〔蜀〕花の開をいふ也。

○おかたまの木 (431)

〔蜀〕岳玉の木也。

のように珍しい詞、耳馴れぬ物の名を尋ねる場合がそうである。現代の初学者でも恐らく同じように発問するであろう。

しかし、問者の質問は我々からすると少し不審なこだわり方を示すことがある。以下それらを分類しつつ掲げてゆきたい。

まず、歌に出てくる景物について、その実態をしつこく尋ねる質問がある。

①秋のゝの花にまじりさく花の〔色ニヤ恋ヒム逢フヨシヲナ

ミ〕 (497)

問件花何哉。

〔蜀〕いづれの花にても侍りなん。たゞ色に出てやこひんといふ也。

②いそのかみふるのなかみち〔ナカナカニ見ズハ恋シト思ハマ

シヤハ〕 (679)

問中路歎、若は長途歎。件路何様なる所哉。

〔蜀〕たゞなかくといはんとてよめる也。

③おく山のいはがきもみぢ〔散リヌベシテル日ノ見ル時ナクテ〕

(282)

問何様なる所哉。

〔蜀〕関雄が居所、今の禅林寺也。

④〔我恋ヲ忍ビカネテハアシヒキノ〕山たちばなの色にいでぬべし (668)

問山橘、色何様物哉。

〔蜀〕葉は青く実は赤也。

問者は、①では「秋の野に尾花にまじり咲く花」が何の花であるかを知り、②では「布留のなかみち」がどのような道であるかを知ることが各々の歌を理解するために重要だと考えているようである。これらは普通は我々のあまり気にしないことに属するのではなからうか。それが我々の鑑賞の粗雑さの故とばかりは言えないのは、俊成も例えば①では「いづれの花にても侍りなん」と問者の関心の持ち方に否定的であることから知られよう。俊成は①・②で「尾花にまじり咲く花」は「色にや恋ひむ」を引き出すための、「布留のなかみち」は「なかなかに」を引き出すための序詞であり、ただそれだけのものと繰り返し強調している。ちよつと見ると、「……は何か？」という問いに対して「それは単なる序詞だ」という答えはうまくかみあつていないようにも感じられるが実はそうではない。これについては後に改めて論ずる。

三、「なぜその物でなければならぬか？」

⑤すまのあまのしほやき衣〔ヲサヲ粗ミ間違ニアレヤ君ガキマ

サヌ〕 (758)

問すまと差条如何。

〔蜀〕すまとも、いせとも、いづくといふとも、をたじことなり。
なま本ママ

ここでは問者はこの歌に登場する海人がなぜ須磨の海人でなければならぬか、と問うが、これは我々の意表をついた質問では

ないだろうか。俊成もかなり強く、須磨でも伊勢でもどこでも同じことだ、こたわるようなことではないと却下している。この種の問い、すなわち歌中に登場する物について「なぜその物でなければならぬか？」と尋ねる問いはほかにも挙げることができる。

⑦ くれなるのはつ花ぞめのいろふかく〔思ヒ心我忘レメヤ〕

(723)

問 紅はつ花ぞめと云事候歟。其は色殊に深歟。

答 しかなり。

⑧ 〔秋風ノ吹キ裏返ス〕くずのはのうらみてもなをうらめしきかな (823)

問 何草も被吹風ては返歟。而葛をしも如此云習申す如何。

答 くずのはのうらのことに白くおもてはあをくて、いちじるしくみゆる也。よりてよみならはせる也。

⑨ みちのくのあさかのぬまの花かつみかつみる人にこひやわたらん (677)

問 花かつみとは蔣の花を申歟。必件のぬまに為名物生たるにや。

答 あさかのぬまに花かつみのある也。

問 かつみといはん料許有此上句歟。

答 しかなり。

問者は⑥ではなぜ「紅の初花染め」でなくてはならないか、⑥ではどうして「葛の葉」でなくてはならないか、⑨ではどうして花かつみは「陸奥の浅香の沼」になくてはならないのか、と尋ねる。どれも一応俊成は答えているが、最後の⑨では、これは単なる序

詞でそれ以上のものではない旨答えている。この部分「かつみといはん料許有此上句歟／しかなり」というのは、前節④の「たゞ色に出てやこひんといふ也」、⑤「たゞなかく／＼といはん」とよめる也」という答えと類似していることが注意される。

恐らく、前節で問者が花の名前や土地の模様などを尋ねていたのは、それらの物が和歌に登場する必然（なぜその花？」「なぜその土地？」）を理解するための階梯だったのであろう。しかし常にそのような必然性を求めようとすると、恣意な理由付けに墮してしまいやすい。俊成は歌の表現をそのような方向に深読みしていこうとする問者の姿勢に難色を示し、「単なる序詞だから深読みしないように」と繰返し答えていたのであろう。また、その必然性について答える際も、⑥でのように葛の実際の形状からする常識的な答えや、⑨でのように「歌枕」としての規範という程度の答えに留めているのである。

問者の立場は、やや一般性を持たせて言えば、古今集の表現の背後に、それを成り立たせる必然が隠されているのではないかと仮想する立場といえることができる。しかしこういう言い方ではまだ不鮮明である。

三、「その由縁は何か？」

① 霜のたて露のぬき〔コソ弱カラシ山ノ錦ノオレバカツ散ル〕

(291)

問 若本説歟。

答 只いへるなるべし。

①〔我恋ヲ人知ルラメヤ數妙ノ〕枕のみこそしらばしるらめ

(504)

問枕知我恋事、有由緒哉。

答其初由緒不知給。たゞ枕は寢所の物なればしらんと謂な
らはしたるにや。

②あすかゞはふちはせになる〔世ナリトモ思ヒソメテム人ハ忘
レジ〕(687)

問此事、何事よりかくは云伝哉。

答只此河の一定淵瀬の不定歟。明日香と云に付、昨日淵ぞ
今日の瀬に成と読之故歟。

③さむしろにころもかたしきこよひもやわれを待らんうぢのは
しひめ(689)

問此事根元、又何事哉。(略)

答宇治橋姫と申物語候也、其を御覽すべし。但其物語、神

代等の昔事なるか、将又此哥に付て其物語を作る歟、

此哥読人不知と云、此事不分明(略)

④〔待テト言ハバ寢テモ行カナム強ヒテ行ク〕こまのあしをれ
まへのたなはし(739)

問たなはし何なるを申哉。駒足折事、若有由緒事哉。

答たなはしとはたゞいたなどをうちわたしたるはしなるべ
し。こまのあしをる、無由緒。たゞいまとまらでゆくが

くちをしければ、こまのあしおれといへるなり。

右の諸例では問者はそれぞれの歌について、「本説」「由緒」
「根元」などと称するものが存在するのではないか、と俊成に尋

ねている。「本説」「由緒」「根元」等の語に相互にどのような意
味のちがひがあるのかは判然としない。内容からみて例えば「本
説」は漢詩文の典拠のごときものを指すかとも想像されるが、こ
こではそういった差異よりも、問者が古今歌の表現の背後にそれ
を成り立たせる根本的な原拠を想定し、俊成にそれをききただそ
うとしていることを確認したい。前節でみた「なぜその物でなけ
ればならないか？」という問いは、結局その「物」にまつわる
「由緒」の類を求めることにつながっていたのではないか。

一方、俊成は「一々の問いに対して「只いへるなるべし」「其初
由緒不知給、たゞ……謂ならはしたるにや」「無由緒」と強硬に
問者の想定を排除しようとしている。唯一「根元」を語ったのは
①の「うぢのはしひめ」の場合であるが、そこでも俊成は「宇治
橋姫」という物語を見るように、とは言いつつも、但し其の物語
は本当に「神代等の昔事」なのか、あるいはこの古今歌による創
作にすぎないか不明なので注意すべきだ、と橋姫物語(興義抄等
に引くものであらう)の素性に疑問を呈することを忘れてはいな
い。さらに例を挙げよう。

⑤くもりびのかげとしなれるわれなればめにこそみえね身をば
はなされず(728)

答これはたゞかげのやうにその人の身をはなれぬを、めに
みえねばえしらぬならんといはんとて、くもりびのかげ
とはいへる也。非別事。

⑥ほりえこぐたなゝしをぶねこぎかへり〔オナジニヤ恋渡リ
ナム〕(732)

(例)たゞをなじ人にやこひわたらんといはんとて、たなゝしをぶねこぎかへりといへる也。無別由緒。

⑥おとこ山のむかしを思いでゝ女郎花のひとつきをくねる(仮名序)

(例)これらはよそへいへる事どもなり。ふかき事にはよばず。

これらの例では俊成の答のみが記されているが、前掲①②③④の類似から、問者が「曇り日に影となつた男」「棚無し小舟を漕いで恋人の許へ通う男」「男山で昔を懐しむ女郎花」などについてその「由緒」「ふかき事」を尋ねようとしていたと推定してよいだろう。俊成はいずれも「そのようなものはない」と退けている。

問者が求めているのは、これらの場合、具体的にはある歌の表現を支える起源譚であるようだ。前節までにとりあげた例の中でも、例えば⑧で「布留のなかみち」とはどういう所か？と問者が尋ねるのは、おそらくその場所にまつわる恋物語(布留だから、奈良時代には遷るものと想定されだろう)の類を仮想していたのであろうし、⑨「須磨の海人」でもやはりそれにまつわる具体的な物語があり、そのことを本にして詠んだのではないかと疑っていたのに違いあるまい。

和歌の背後にそのような起源譚を求めようとする態度は、言うまでもなくある種の中世古今注について指摘されている特質である。

例えば片桐氏『中世古今集注釈書解題二』(昭48)にそのよう

な注釈書がまとめられている。いま一例として弘安十年古今集注系の書陵部本「古今抄」から引くと、「逢坂の関に流るる石清水言はで心に思ひこそすれ」(537)について同注では「彼の逢坂ノ石ノ清水ヲ、フカキ思ニヨソヘテヨム事ハ由緒アリ。成務天皇ノ御時、奈良見ト云者ノ娘、男ヲ恨テ身ヲ投タリシ水也。故ニ恨フカキ事ニ云ナリ」とその「由緒」を述べている。これはこの歌の上句について「なぜ逢坂の関の石清水が出てくるのか？その必然は何か？」と思考をめぐらした結果、日本紀の世界にその起源譚を仮構してみせたわけである。古今問答問者が求めているのはまさにこのような答えだったのであって、俊成のように「無別由緒」と起源譚を語ること拒否する答者には満ち足りぬ思いをしたのではなかつたらうか。

古今問答で問者が俊成に由緒を尋ねている歌の中には、中世古今注で実際に起源譚が捏造されたものも存する。例えば有名な「五月を待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(139)について古今問答には次のようにある。

問さ月待とは 四月歟。此哥橘は寄亡者也。異伊勢物語歟。

問者は「昔の人の袖の香ぞする」について、「昔の人」は「亡者」であり、伊勢物語六十段にいう別れた妻への呼びかけとは違った詠作状況を考えている。これは何かそのような仕立ての話を問者が既に知っており、俊成にそれについてどう思うか尋ねたのであろう(俊成の答は記されていない。多分肯定的な答えではなかつたのだらう)。このとき問者が具体的にどういふ話を想定していたかは不明だが、弘安十年古今注は「花橘ノ袖ノ香ト云ニ二

義アリ」として

・日本記に、天武天皇が百濟から将来された橘を愛でてこれを袖につつんでいたが、崩御ののち御衣をとりだしてみるとその香が残っていたので遣臣參議岡丸が泣きながら天皇を追慕したとある。

・漢書に、田夫・興芳なる夫婦あり、妻興芳の死んだ後七日たつてその墓から橘が生え、あたかも亡妻の衣の袖のように香つたので田夫は葉を摘んで保存したという。

という二説をあげている。いずれも「昔の人」を「亡者」に解し、その由緒を仮想しているのであって、古今問答問者の知っていた話も同類のものであったと思われる。

実は奥義抄にもこの歌の釈がある。歌学大系本320頁に

橘を昔の人のそでの香によそふことは、問守と云ふ者の、とこよの国より袖につゝみてきたりしかばいふなりと申す人もはべり。

とあるのは書記にある田道間守の話を故意に歪めて「袖につゝみて」橘を将来したものとし、以て当歌の由縁としようとしたものであるが、日本紀の世界に起源を求めようとする姿勢は弘安十年注の第一説と通う。弘安十年注の如き注釈態度は、古今問答のころには水面下では盛んに行われていたのではないか。

奥義抄や和歌色葉の古今歌の注には他にも類似の例が見える。

「もろこしのよしのゝ山にこもるともおくれむと思ふわれならなくに」(1049)につき奥義抄は「ものしりたりおぼしき人」の説として「李部王の記に、吉野山は五台山のかたはしの雲に乗りて飛

びきたるよし見えたり。さればもろこしの吉野の山とはいふ也」という説を紹介しているし、和歌色葉では「かはづなくゐでの山吹咲きにけりあはましものを花のさかりに」(125)について或書説として橘諸兄が井手寺の周囲に橘を植えたがその開花のまゝに讒言によつて殺され、見る事ができなかった意とする説や、諸兄ではなく軽大臣だとする説などを引いている。この種の由来譚は決して稀ではない。

はやく片桐氏は院政期歌学書の例を検討しつつ、中世古今注の方法が平安期からの流れを引きついでおり、いかに無稽に見えようとも決して孤立した特殊な営みなのではないことを指摘しておられる。古今問答は新古今期の一般の歌人が古今伝授に期待していた内容に、中世古今注の世界と通う種類の講釈が少なからず含まれていたことを示唆する貴重な資料であるということができよう。この点で本稿は片桐氏の示された視点を継承し、補強するものである。

四、史的位置づけの試み

さて、古今問答問者の質問を分析しつつ、それが和歌表現の背後に表現を必然たらしめる「由緒」を求めようとする志向を有していたことを論じてきたが、中古から中世にかけて存在したそのような和歌享受の態度を、我々はどのようにうけとるべきなのだろうか。

問者の姿勢はやはり通常の和歌享受のあり方を逸脱しているように思えるし、ましてその種の享受者に迎合して次々に恣意な起

源譚を捏造する中世古今注の態度は容易には理解できないものがある。いま、古今問答問者の場合に限って、彼の和歌享受がなぜ我々に普通ではないと思われるのか考えてみたいが、これに答えるのはそう簡単ではない。和歌表現の細部に對し「それはどんな物か?」「なぜその物でなければならぬか?」「その由緒は何か?」と考えていくことは、そのひとつひとつをとってみれば我々も試みないわけではないからである。「由緒」のことにしても、古今集には實際に本文本説を踏まえた歌があるのだからそれを知ることとは重要なはずである。例えば「故郷は見しこともあらず斧の柄の朽ちし所ぞ恋しかりける」(991)を読むのに、王質の故事を知らなければ意味を解することはできない。

では問者の特殊性はどこにあるのだろうか。ひとつには享受に際して表現(あるいは表現された歌自体)とその「根元」「由緒」との価値づけが転倒されている所にあるとは言えないだろうか。

いま挙げた「故郷は……」の歌でも、「仙人が碁を打っているのを見ていたら、斧の柄が朽ちるほど長い時間が経過していた」という故事が「由緒」であるとは言えるが、作者の紀友則はそのことを伝えたいがためにこの歌を詠んだのではない。この故事を踏まえて往年の碁がたきに懐旧の情を言い送ることが目的なのである。ところが、古今問答問者の興味は、一首の主旨やその表現の機微を描いたまま、その背後に「由緒」があるかどうかに向かいがちではなからうか。

とくに注目したいのは、一例だけが引用例⑨(男山の女郎花)において俊成が「これらはよそへいへる事どもなり。ふかき事に

はをよばず」と答えていることである。問者にとって「由緒」の類は、表にあらわれた表現そのものより「ふかき事」と認識されているのではないか。この言い方に中世注釈に頻出する「甚深義」といった口調を思い合わせるのは決して強引ではないか。

この「深さ」の感覚が我々と問者とを隔てているのではないか。我々は友則の歌の背後に王質の故事が隠れていて、解説の鍵になっているとは認めるが、それが「深い」とは感じない。

問者は和歌表現の細部にこだわらず、どこかに「深い」次元への目印がないかと探している。ちょっと目に留まる「物」があれば、「なぜその物がここにあるのか?」「それがここにあるにあたっては、何らかの深い理由があるのではないか?」と思考をめぐらしはじめる。そのとき、和歌そのものが伝達する趣旨は単に表層的なことであり、「浅い」ことにすぎないと感じられてくる。表現への目配りは放棄され、典拠は表現の素材でなく、表現を支える奥義のように読みかえられてゆく。これは例えば歌物語作者の想像力などとは全く志向を異にするものであり、この時代にならなければあらわれてこないものである。

もうひとつ、問者に特徴的なのはその執拗さである。彼はたまに一首に相対した際に「由緒」があるかと疑ったのではなく、多くの古今歌に對しつぎつぎに追尋を試みてゆくのであり、それはすなわち古今集という歌集全体に對して何らかの「深さ」を感じていることを示しているものと解される。つまり問者にとっては古今集とは表面にあらわれた歌のみでなく、その奥に何か根源的な秘儀が隠されているような作品と意識されているのでは

ないか。中世古今注ではその奥義は例えば仏教や神道、あるいは儒教的政教観などによって一定の枠を得てゆくようになるが、ここではまだそれだけの思想的うらづけはなく、せいぜい「深さ」を時間軸に投影した「神代等の昔事」というようなイメージ（典籍名としては「日本紀」が宛てられることになるだろうと想像される）しか有していないけれども、問者の意識を支えているのはすでに中世的な何かである。

当時は古今伝授の始発期にあたっていた。実際のな歌のよみかたを親（や乳母）から子へとうけついでいく時期から、和歌の「秘事」（この語は綺語抄初出）を知っていると称する者が広く弟子を求める時代へ変ってきていた。たとえば清輔は古集の説を中心とした自著を「奥義抄」を名づけ、さらにその末尾を「灌頂巻」と称して秘したが、そのような所為は一般の歌人たちにはどううけとられたろうか。実際には清輔の方法自体には別に神秘的な所はなく、むしろ恣意に仮構された起源譚のようなものに対しては「是は或秘蔵の書にいへりとはべれど、たしかにみえたることもなし」（古今歌歌七十二しぎのはねがき）、「このしみづの事やうありげに申す人も侍れど、させる見えたる事もなし」（同八十野中のしみづ）、「たゞしさせる証文も見えず」（古歌二十九おほをそどり）のように「ひがごと」として退ける態度が明瞭である。教長古今集注を見ても、序注のヤマタノヲロチの異伝を除けば由来譚の類はまずないように、伝授の場で神秘奇怪の説が行われていたのでは決してなかった（俊成の場合も古今問答を見れば明らか）。しかし一般歌人たちは古今集というものに対して以前とは異なったイ

メージを持つようになり、一々の難儀のレベルをこえて集全体を奥深い何かを秘めた特殊な書物と感ずるようになってゆくのである。古今伝授は、授ける側の有力歌人たちのあずかり知らない所で古今歌の釈義を歪めていったと考えられる。

従って、古今問答に端的に顯れているごとく、伝授の場は古今歌の深い由緒を聴こうとする弟子と、それを抑圧して普通のことを教えようとする師匠とが向いあうことになりやすかったのではないか。一般には伝授の主導権は師匠側にあるため記録としては残りにくいのが、古今問答のように弟子側が主導権を（何らかの事情で）持つと両者のすれ違いが露呈するのだと思われる。

有力歌人が歌道観を先鋭化させて歌道家を形成し、歌壇を主導しようとする対外的な活動をはじめると、その權威の源となった古今集の姿は、彼らの權威が高まれば高まるほど歌壇の構造の中で歪められ、過剰な読みによる異様な解釈の餌食にされていつてしまう。有力歌人たちは自ら高めた古今伝授の儀式の場において、まさにそのことによって生じた「ひがごと」の群れと対面させられているのだと言えよう。

実際には有力歌人たちも一般歌人たちもその行き方は人により様々であり、細かい検討を要するが、それは別の機会に譲り、本稿ではとりあえず彼らを大きくまとめた形で扱っておくにとどめる。

注(1) 『国文学の文献学的研究』（昭10）。

(2) 『国文学研究史大成・古今集新古今集』（昭35）。

- (3) 天理圖書善本叢書『和歌古註統集』(昭57)。
 (4) 橋井「万時解説」(貴重圖書影印刊行会「万時」付属、昭14・2)、
 谷山氏「貫之と俊成」(国語と国文学37-6、昭35・6、のち「藤
 原俊成 人と作品」昭57に収録)、秋永氏「古今問答」私見(国
 文学研究22、昭35・16)、松野氏「藤原俊成の研究」(昭48)。
 (5) 拙稿「俊成本古今集試論——伝本分立の解釈私案——」(和歌文
 学研究66、平5・9) 参照。
 (6) 橋姫物語については三角洋一氏「橋姫物語」(日本文学33-4、
 昭59・4) が諸説を踏まえて詳細である。
 (7) 勿論「男山の昔を思ひ出て」は古今集889、「女郎花のひとつときを
 くれる」は同1016を指すのであって本来別のことだが、問者はこれ
 を一統きに読んでしまっているのではないかと思われる。なお注
 (9) 参照。
 (8) 同書44ページ。
 (9) 古今問答で由緒が尋ねられた事項のうち、中世古今注に説話が
 あるものとしては引用例④「男山の昔を思ひ出て女郎花のひとつ
 ときをくれる」(仮名序)がある。例えば古今和歌集序開書三流抄
 (片桐氏「中世古今集注釈書解題二」262頁)には平城天皇の時の話
 として、小野頼風なる男に飽きられた女が投身し、その着衣が変
 じて女郎花となって咲き乱れ、頼風が近付くと恨むような気色を

- みせたとあり、男も嘆いて投身、男山に葬られたので仮名序のこ
 の表現になったとしている。
 (10) 橋をめぐるこの種の説話については西村聡氏「中世「花橋」歌
 私注——将来説話を中心に——」(中世文学31、昭61・5)に整理
 がある。
 (11) 『中世古今集注釈書解題二』の「序 本巻の意図」。
 (12) ちなみに「甚深義」に類する言い方は清輔にもすで見える(奥
 義抄下、古今歌釈三十三など)が、そこでは「周到に考えられた
 味わい深い解釈」くらいの意味であるようで、神秘的かした説や
 由来譚的なものではない。
 (13) 寺島樵一氏「二つの「稻負鳥」——宗祇流古今注「裏説」の性
 格——」(島津忠夫氏編『和歌史の構想』平2所収)など参照。
 (14) この説話については小川豊生氏「中世日本紀の胎動——生成の
 「場」をめぐる——」(日本文学42-3、平5・3)に言及があ
 る。
 (付記) 本稿は平成二年十二月の和歌文学会例会での口頭発表を基にい
 くらか改訂を加えたものである。発表時に秋永一枝・新井栄蔵・
 川平ひとし・武井和人各氏より貴重な御意見を賜った。この場を
 借りて御礼申し上げたい。